

えきびょう 疫病との闘い

今年、新型コロナウイルスが世界中で大流行していますが、歴史的にみると全世界では、はるか昔からさまざまな疫病（感染症）が流行してきました。日本で多くの疫病の治療法が確立されたのは、明治時代以降のことですので、それまで人々は、どのような方法で疫病と闘っていたのでしょうか。

3つの疫病

江戸時代、天然痘・はしか・水ぼうそうは、一生に一度はかかる3つの疫病として、人々に恐れられていました。中でもはしかは約20年に一度のペースで大流行し、文久2年（1862）の流行では、江戸だけで数万人が犠牲になったと言われています。この時は、養生の方法や食べ物・行動への戒め等を記した「はしか絵」という錦絵が多くの絵師によって描かれ、人々は予防や回復を願って買い求めたといえます。当時は、入浴や散髪、酒・魚・野菜の飲食を100日程度止めないと、病気が

が再発したり後遺症が残ったりすると信じられたため、風呂屋や床屋、魚屋などから客が消え、経済的混乱が起こったことが伝わっています。

コレラの流行

また、江戸時代末期の開国によって流行したのがコレラで、特に安政5年（1858）に中国から長崎へと来航した米軍の軍艦ミシシッピーによってもたらされたコレラは、たちまち全国に広まり、多くの犠牲者が出ました。コレラに感染した人はことごとく死亡することから、「三日コロリ」などとも呼ばれて人々に恐れられました。コレラの流行は、高島市に住む人々にも影響を及ぼしたようで、市内に残る複数の記録には、コレラという病名は登場しませんが、「二日二テ死す病」または「不思議の病」が流行したことが記されています。もっとも、当時は決定的な治療薬もなく、この年に幕府から出された触書の内容は、身体

を冷やさないようにすることや大酒・大食を慎むことなどの予防策にとどまるものでした。

大般若経の書写

こうした疫病と闘った当時の人々の行動を伝える石碑が



大般若経石

市内に残されています。県道高島大津線と和田打川が交差する橋のたもとに建つ「書写 大般若経」と刻まれた石碑は、大溝城下に疫病が流行したことから、時の藩主の分部光貞が疫病退散を祈念して、大般若経の写経を埋めさせたその場所に建てたものと伝えられています。石碑には弘化3年（1846）の年号が刻まれています。（石碑は川の南側にありますが、現在は北側に移動しています。）

のたくましさをお届けするにも、紅葉した時期に再びこの場所から撮影したいと思えます！（Y.O）

参考文献：『高島町史』、『今津町史第2巻』、『高島の昔ばなし』

図文化財課 ☎（25）8559

大般若経は、奈良時代から除災の経典として書写されたり転読されたりしたことが知られています。大般若経の書写を伝えるこの石碑は、病に苦しめられても、それに立ち向かおうとした当時の人々

編集感

今月号の表紙は、マキノ町森西地域にある田屋城跡からの眺望です。

田屋城跡は、森西地域を抜け、獣害対策の電気柵を越え、いきなり現れる急な斜面を登りきると、そこにあります。そこからはメタセコイア並木を南側から眺望できる絶好のスポットがあります。

皆さんに高島の絶景をお届けするためにも、紅葉した時期に再びこの場所から撮影したいと思えます！（Y.O）